

31. フィリピンにおける地域医療の現状—ミンドロ島・レイテ島を例として—

医学部学生

岡田 博, 川俣安史, 小松崎 誠, 丁 倫奈,
彌勒寺紀栄, 飯村拓哉, 知場 一記

熱帯病寄生虫病室

林 尚子, 千種雄一

国際環境衛生室

大平修二

フィリピン保健省

Eunice J. Ilagan

【目的】

フィリピン共和国は世界第2位の群島国家のため、地域医療の充実が国民医療水準を上げるために重要な課題となっている。今回われわれは、本学の海外研修の一つであるフィリピン研修に参加し得たことから、地域医療を中心に同国の保健システムや医療保健政策の現状を学ぶことを目的とし、日本のそれと比較し考察した。

【対象・方法】

フィリピン保健省 (Department of Health : DOH) が現在どのような医療政策を行っているかを検討し、それに基づいた医療現場の実際について調査した。対象病院を公立と私立とに分け、また公立病院については高度医療が行われる管区病院、州立病院、地域病院および地域医療の第一線である町・村の保健施設について、それぞれ調査し、文献的及び現地医療スタッフからの聞き取り調査を加え考察した。

【結果・考察】

まず、フィリピンと日本の医療についてその制度面のみでなく、医療レベルにおける大きな相違があることが理解できた。フィリピンでは村・町保健施設に准地域保健師を常駐させ、地域（過疎地も含め）住民が平等に医療を受けられるよう、血管網のような特有の医療システムを採用している。さらに BEmONC (= Basic Emergency Obstetric and Neonatal Care) 施設などの乳児死亡率を下げるプロジェクトや、P100 と称する common disease に対する薬剤を低廉な価格で提供する対策といった、低所得者や先住民に対しての健康水準の上昇にも重点を置いている。しかしながら地域住民の衛生観念の不足、あるいは、高度医療を受けるためには、かなりの経済力がなければならない格差、医療設備が日本と比較して整っていない等の問題が残されているように感じた。

総括して、フィリピンにおける医療の背景は日本のそれと大きく異なるが、国の現状に即した地域医療が行われていることが理解できた。今後、同国の医療水準の上昇に、これらのシステムが寄与するものと思われる。

32. フィリピンにおける地域医療従事者確保のための斬新な医学教育システム

— University of the Philippines, School of Health Sciences, Palo, Leyte —

1) 医学部学生 2) 熱帯病寄生虫病室

3) 国際環境衛生室 4) 国立フィリピン大学マニラキャンパス-レイテ分校

1) 知場 一記 1) 飯村拓哉 1) 彌勒寺紀栄

1) 丁 倫奈 1) 小松崎 誠 1) 川俣安史

1) 岡田 博 2) 林 尚子 2) 千種 雄一

3) 大平修二 4) Jusie Lydia Siega-Sur

【目的】 フィリピン共和国における地域医療従事者確保のために1976年に設立されたフィリピン大学マニラキャンパス-レイテ分校 (SHS) での斬新な医療職教育システムについて報告する。

【対象・方法】 フィリピン研修 (本学学生海外研修) において、SHS で実地研修をした。その間、教官や学生、卒業生にインタビューし、その実状について検討し考察した。

【結果】 1970年代のフィリピンでは郡部に人口の73%が住んでいたが、一方で、国内医師の僅か3%のみがその医療が携わっていた。現在でも、この地域格差は大きい。さらに、多くの人材が労働環境や所得条件の良い海外に流出就労してしまう (brain drain) ため、地域医療従事者の確保が急務とされている。そこで SHS では、国内で最初に階段状教育カリキュラムシステムを試みた。そのシステムとは、要約すると以下のようである。特定地域 (無医村、災害復興などの優先順位がある) から推薦された奨学生を受け入れる。学生には一定の資格や学位を得た後、地域へ戻って、最低三カ月の地域医療貢献の研修 (service leave) が義務付けられている。その後、その資格を生かし地域にそのまま貢献するか、あるいは、地域の推薦や本人の意思があれば、再び大学に戻り更に上級の資格 (准地域保健師-看護師-地域保健師-医師の順) への教育を受けることが可能である。

【考察】 インタビューを通して、学生や教官の意欲が高く、教材が不足する中で質の高い教育がなされているように思われ、恵まれた教育環境にある我々は、今以上に努力する必要があると感じた。また、SHS 卒業生の95%は国内全地域に限らず働いているということで、フィリピンにおける地域医療従事者確保に大きく貢献していると思われる。今後、このようなシステムがより広がるのではないかと考えた。

【結語】 各医療職を個別の教育課程で養成するのに比較して、service leave の期間に専門性の高い人材を地域医療の現場で有効利用できる大変斬新な教育システムと考えられる。